

演習発表・卒論中間報告の技法

仮想大学 井上浩一

1 レジюме（報告要旨）の作成——発表の準備

(1) 発表者はレジюме（報告要旨）を配布します。

長年、教師をしていますと、配られたレジюмеをちらっと見ただけで、発表の出来、不出来が予想できます。先生に「おっ、これは」と思わせるようなレジюмеを作りましょう（もちろん、中身がもっと大切ですが）。なお、レジюмеは要旨ですから、詳しくればよいというわけではありません。発表の内容がよくわかる的確なまとめを作るようにして下さい。

(2) レジюмеの作成はそれほど難しくありません。——付録の実例を参照

『**レポート作成の手引**』のステップ7で作った「最終アウトライン」を整理して、それに必要な文章を書き加え、最後に資料や参考文献目録を付ければよいだけです。

具体的に説明します。最終アウトラインは論文・レポートの骨格、詳しい目次でしたね。レジюмеも発表の目次です。最初に、表題・発表者名・日付を記し、そのあと発表内容を箇条書きします。ただし、1、○○○○、2、××××、……、という見出しだけではなく、各項目で自分が主張したいことを簡単に書き入れます。必要な関連資料（地図・図版……）も盛り込んで下さい。関連資料は本論とは別にした方がよいでしょう。なお、発表を聞く人はレジюмеにいろいろ書き込みますから、行間隔をたっぷりとって下さい。

(3) 時間に余裕があれば発表原稿（簡易版）も作成します。

西洋史演習での研究発表は、配布したレジюмеに沿って行ないます。ただし、レジюмеができれば発表は大丈夫というわけではありません。発表原稿（発表する内容がそのまま文章になっているもの）を作るのが理想ですが、手間がかかりますので、その簡易版を作りましょう。

レジюмеは基本的に箇条書きになっています。その各項目ごとに、そこで話す内容を具体的に書き加えます。もちろん、自分用の覚書きです。こうしておけば、話す順序が狂ったり、説明し忘れたというようなミスはなくなります。

2 発表と質疑応答

(1) レジюмеを配布して発表を始めます。

話すことをだいたい記した簡易版の発表原稿がありますから、安心して、ゆっくりと丁寧に報告して下さい。持ち時間をあらかじめ確認し、手元に時計をおいて時間配分にも注意します。

発表者以外の方はレジюмеを見ながら話を聞きます。演習の受講生は、発表について質問や意見を求められますから、聞きながら、重要どころ、よくわからなかったところにアンダーラインを入れたり、気づいた点、疑問に思ったことなどをレジюмеに書き込みます。

(2) 発表が終わると質疑応答です。

たいていは最初に先生から、全体的な注意や意見が述べられるはずですが、学生諸君も遠慮せずにどんどん発言して下さい。質疑応答も演習の重要な一部です。初歩的な質問をして恥ずかしいとか、こんなこと言えば発表者は気を悪くするのでは、といった気遣いは不要です。

先生の助言や友人の意見はきちんとメモしておきます。質問を受けて答えられなかった点も書きとめます。それが最終的なレポートに生きてきます。

※よっぽどひどい発表ですと、先生もコメントする気力をなくすことがあります。先生から批判がなかったから完璧な発表だった、というのは大きな誤解です。逆に言うと、先生からあれこれ指摘されても、がっかりすることはありません。改善の見込みがあるということです。

※友だちの「ここがわからなかった」という指摘はとても大切です。友人が理解できないところは、たいてい、あなたもよくわかっていないところです。発表が多少不備でも、先生はプロです。自分で補って「こういうことが言いたいのだろう」と推察してくれますが、友だちはそうはゆきません。**友だちの質問は、あなたの発表の欠点をしっかり暴いてくれます。**……有難い、有難い。友だちの発表にも「有難い」質問をして上げましょう。

【参考】演習発表・卒論中間報告の評価項目（教科書『私もできる西洋史研究』29ページ参照）

問題提起——扱う問題が明確に示されているか。	5、4、3、2、1
論旨の展開——問題提起から結論まで論理的に構成されているか。	5、4、3、2、1
論拠の適切さ——正確で客観的な根拠に基づいて論証しているか。	5、4、3、2、1
結論——明確な結論が出されているか。	5、4、3、2、1
話し方——適切な速さで明瞭に話したか、制限時間を守ったか。	5、4、3、2、1
総合評価——報告者の主張が理解できたか、応答は的確だったか。	5、4、3、2、1

3 発表のあとで——レポート提出

(1) 先生や友人から出された意見や疑問について調べ直します。

その場で答えられなかったことは、図書館などで調べて補っておきます。先生の助言を受けて、修正すべき点も修正します。それをふまえてレポート・卒論をまとめます。

※「**大学はゼミと図書館**」、演習（ゼミ）の予習・復習に図書館を活用して下さい。

(2) レポートのまとめ方は『レポート作成の手引』を見て下さい。

ステップ7「最終アウトライン」までひととおり行なって、演習の発表をしましたが、助言や質問を受けて修正するためには、ステップ4「文献調査」に戻ってやり直す必要があるかもしれません。あるいはステップ6に戻って本を読み直すことも。いずれにしても、いったん戻って体勢を立て直し、ステップ10「仕上げ」まで進めてレポート・卒論の提出です。

※最後にレジュメの実例をお見せしましょう。紹介するのは「西洋史演習」のレジュメです。

レジュメの実例 ※実際はもっと行間を空ける

初期キリスト教への迫害

2018年9月20日 西洋史演習

西洋史コース3年 ○○×× (学籍番号)

はじめに

発表の課題: 紀元1世紀のキリスト教の状況を、ローマ帝国による迫害に焦点を当てて考察する。

考察の方法: タキトゥス『年代記』とスエトニウス『ローマ皇帝伝』の記事を比較して、迫害の実態、キリスト教徒が嫌悪された理由についてまとめる。

1、ネロ帝のキリスト教徒迫害に関する記録

(1) タキトゥス『年代記』

① タキトゥス『年代記』の記述

タキトゥス『年代記』15-44の引用——スペースの都合で省略しました (井上)

② タキトゥスの記述の特徴 (『古代ローマ人名辞典』など)

- ・元首 (皇帝)、元老院議員、首都ローマにおける事件に関心
- ・劇的、心理的、修辭的な表現を用いる
- ・主観的な判断で歴史を歪める傾向

(2) スエトニウス『ローマ皇帝伝』

① スエトニウス『ローマ皇帝伝』の記述

スエトニウス『ローマ皇帝伝』6-16と6-38の引用——省略しました (井上)

② スエトニウスの記述の特徴 (『ローマ皇帝伝』の解説など)

- ・皇帝の業績や言動を項目ごとに箇条書きする
- ・人物の業績、言動を時代や歴史的背景と切り離して述べる
- ・皇帝が関与しない出来事は重要なものでも省かれる

2、両者のキリスト教に関する記述の比較

(1) 共通点

- ① キリスト教徒を「忌わしい集団」と認識している
- ② ネロ帝がキリスト教徒を迫害すること自体は良いことと考えている

(2) 相違点

- ① タキトゥスは、ネロ帝の残虐な処罰についてキリスト教徒を不憫に思っている
- ② タキトゥスはローマ市の大火とキリスト教徒迫害を結びつけている ⇔ スエトニウス

(3) 両者の記述の差異の原因

……以下省略 最後に「まとめ」と参考文献が付いています (井上)